

【注意】 答えはすべて、(その8)の「解答らん」に書き入れなさい。本文中の句読点や記号はすべて一字と数えます。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には省略および表記を一部変えたところがある。

ひとすじの道が、私の心に在った。

夏の早朝の、野の道である。

青森県種差海岸の、牧場でのスケッチを見ている時、①その道が浮んできたのである。

正面の丘に灯台の見える牧場のスケッチ。その柵や、放牧の馬や、灯台をとり去って、道だけを描いてみたら———と、思いついた時から、ひとすじの道の姿が心から離れなくなった。

道だけの構図で描けるものだろうかと不安であった。しかし、道の他に何も描き入れなくなかった。A現実の道のある風景でなく、B象徴の世界の道が描きたかった。したがって、どこの道を描くというわけではないのだが、いろんな条件を考えてみると、やはり、種差牧場の道を手がかりにして構成するのが、まとまりがよさそうに思えるのだった。しかし、その牧場をスケッチしたのは戦前のことで、十数年も前のことである。はたして、②あの道が、あのままの姿で、いまでも在るのだろうか。心細いことであった。

行っても無駄ではないか、何も、③あの道にこだわることはないとも考えられた。昭和二十五年のことであるから、旅行事情もあまり良いとは云えない頃だったが、私の懸念は、そのことではなかった。最初の抛り処となった現実の風景が、すっかり変ってしまった。そういう場合、せっかく心の中に形成されかかっている道の影が、薄れてしまうのではないかと心配であった。

それでも、どうしても行ってみたくなかった。東北本線が水害で不通になっていた時なので、奥羽線で青森を廻って八戸に着いた。種差海岸の牧場へ行くと、④その道は荒れてはいるが、以前のまま牧場の中を通って、灯台の丘へと、ゆるやかに続いていた。

1「来てよかった」と、ひとりごとを云って、私はその場に立ちつくした。

海へ傾斜している芝のスロープの中に、その道は両側を雑草にふちどられて、まっすぐに、ゆるやかに上ってゆき、やや、右へ曲るうとして、視野から消えている。そして、遠く向うの丘を、その続きと思える一線が横切っているのが見える。

2しかし、十数年前のスケッチから、私の心の中に浮び上ってきた道と、この現実の道は、かなりの隔りはあった。大づかみな構図としては、この丘と道との組合せでよいように思えたが、いま、目の前にある道は、夏の陽に灼かれ、土も草も乾いていた。道の土の持つ落着きのある情感、両側の草と道との境の細やかな味わい、そういうものが失われていた。向うの丘のスカイラインも、以前はゆったりとした線であったが、いまはその頂きに岩が露出している。十年の風雪が洗い出したものであろうか。戦争の荒廃の跡は、この、みちのくの果ての牧場の道にも、あらわれていると思えるのだった。

私は、しつとりと潤いのある道が描きたかった。事情を話して牧場へ泊めてもらい、朝早く、まだ陽の登らぬうちに、この道を写生した。市川へ帰ってきてからも毎朝、近くの川の堤の道を歩いて、露に濡れた草むらや、土の色を見ては参考にした。こうして、「道」の制作の準備を進めていった。

道は、歩いて来た方を振り返ってみる時と、これから進んで行こうとする方向に立ち向う場合がある。私はこれから歩いて行く方向の道を描きたいと思った。3私達には、これから、そこを歩いて行くという感じが起る。それに反して4、いままで辿って来た道を振り返った感じになり易い。

この道の作品を描いている時、これから歩いてゆく道と想っているうちに、時としては、いままでに辿って来た道として見ている場合もあった。絶望と希望とが織り交った道、遍歴の果てでもあり、新しく始まる道でもあった。未来への※憧憬の道、また、過去への郷愁を誘う道にもなった。しかし、遠くの丘の上の空を少し明るくして、遠くの道が、やや、右上りに画面の外へ消えているようにすると、これから歩もうとする道という感じが強くなってくるのだった。

人生を道にたとえるのは平凡である。しかし芭蕉が、あの不朽の紀行文に5「奥の細道」と題したのは、その文中に、おくの細道の山際に云々の文があるところから、現実の道の呼び名でもあり、奥州地方の細々とした道の意味からでもあるが、辺鄙な地方の細々とした道をわけて旅行く自分の姿、芭蕉の人生観、芭蕉の芸術観の象徴として選んだ題名と云えるだろう。6私も、いつも旅をし、旅を人生とも、芸術とも感じている人間であって、遍歴の象徴としての道は、かなり鮮明な映像となって、心に深く刻みつけられている。私もいろんな道を歩いた。

早春の丘の道。あざやかな緑の縞模様を描く麦畑。まだ芽の出ない桑畑。遠くの嶺々には白い雪。エメラルドの空に軽やかな雲。溪流に沿って、いくつもの寂しい山村を結び、杉木立の影を落す旧街道。石をのせた板葺き屋根。暗い部屋の中の蚕棚。※おさの音。

※ぶな、みずならの林の奥へと、落葉を敷きつめた道がある。やわらかな足裏の感触。落葉を踏む音。そこ、ここに白樺の幹があざやかに立つ。林の奥に明るい楓の朱色。

雪国の道。踏み固められたところを、ひろって歩く。そりが来る。すれちがいざまにわきへ寄ると、よろけて深い雪の中に踏みこんでしまう。若い女の頭巾の鮮やかさ。

都会の雨の舗道。飾り窓の華やかな灯りがにじむ。地下室のバーから昇ってくるジャズの旋律。疲れた顔の人々。※寂寥。

新しい※美の字の徽章の学帽。鶯谷の駅から桜の花を踏んで、博物館のわきを通り学校へ通った道。

秋の夜。美術館の壁に貼り出された入選者発表。暗い中に人々のどよめき。初入選の喜びに、宙に浮く足どりで坂下の郵便局へ、公園の道を通った——神戸の両親に電報を打つために。

ローマ郊外のアッピア街道。廃墟と糸杉と傘松。パウロがキリストのまぼろしを見た道。夏の雲。遠い雷。

古い※破風造りの家並み。時計台のある都門の塔の上に、こうのとりの巣。広場の泉。馬車の蹄が夕闇迫る石畳の道に火花を散らして通り過ぎる。バイエルンの古都。

召集令状を受けとりに、品川駅から灯火管制下の暗い街を、区役所へ歩いて行った雨上りの道。

まだ熱い瓦礫と、切れ落ちた電線、たおれた馬。黒い煙。日蝕のような太陽。空襲下の熊本市の道。

母の※柩車を曳いて行った※荊沢の道。風が強く新雪に輝く富士山が澄みきった空に浮んでいた——

道の思い出は尽きない。これから、どんな道を辿ることか。

人生の旅の中には、いくつかの岐路があり、私自身の意志よりも、もっと大きな他力に動かされていると、私はこの本のはじめの章に書いている。その考え方はいまも変わらないが、私の心の中に、このひとすじの道を歩こうという意志的なものが育ってきて、この作品になったのではないだろうか。いわば私の心の据え方、その方向というものが、かなり、はつきりと定まってきた気がする。しかし、やはりその道は、明るい烈しい陽に照らされた道でも、陰惨な暗い影に包まれた道でもなく、早朝の薄明の中に静かに息づき、※坦々として、在るがままに在る、ひとすじの道であった。

(東山魁夷『風景との対話』より)

【注】※憧憬……あこがれ

※おさの音……機械の音

※ぶな、みずなら……植物の名前

※寂寥……ものさびしいようす

※美の字の徽章……東京美術学校（＝現東京芸術大学）の校章

※破風造り……二つの平面を山形に組み合わせた形の屋根を持った家

※柩車……ひつぎを乗せて運ぶ車

※荊沢……地名（＝現山梨県南アルプス市荊沢）

※坦々と……平らで広いさま

問一——線①「その道」・②「あの道」・③「あの道」・④「その道」は、本文中の——線A「現実の道」・B「象徴の世界の道」のどちらかにあてはまる。それぞれどちらにあてはまるのか。A・Bの記号で答えなさい。

問二——線1「来てよかった」と筆者が思ったのはなぜか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- A 種差海岸の牧場の道が、戦争の被害を受けながらも、昔の思い出として覚えていた道と寸分たがわずにあったから。
- I スケッチの中の種差海岸の牧場の道と、現在の種差海岸の牧場の道との違いを自分の目で確かめることができたから。
- ウ 種差海岸の牧場に行くまでの旅行事情が良くないのではないかと心配したが、思ったより楽に行くことができたから。
- エ 種差海岸の牧場の風景は、戦前と全く変わってしまったが、そこにある道だけは思い描いていたとおりだったから。
- オ 種差海岸の牧場の道は、昔より荒れてしまったものの、心に思い描く道のイメージをこわすものではなかったから。

問三——線2「しかし、十数年前のスケッチから、私の心の中に浮び上ってきた道と、この現実の道は、かなりの隔りはあった」とあるが、筆者はその「隔り」をうめるために何をしたのか。筆者が描きたかった道が具体的に分かるように八十字以内で説明しなさい。

問四 本文中の 3・4 に入る最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- A 下り坂を見おろすと I 登り坂から下り坂に変わると
- ウ ゆるやかな登り坂に向った時 E 急な傾斜の登り坂が立ちはだかる時
- オ 曲がりくねった坂を登りつめると

問五——線5「奥の細道」の作者である松尾芭蕉の俳句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 閑かさや岩にしみ入る蝉の声 I 菜の花や月は東に日は西に
- ウ 朝顔に釣瓶とられてもらひ水 E 雪とけて村いっばいの子どもかな
- オ 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

問六 ―線6「私も、いつも旅をし、……遍歴の象徴としての道は、かなり鮮明な映像となって、心に深く刻みつけられている」とあるが、次の文章は筆者の「遍歴」をまとめたものである。本文の内容に合うように、①～⑤の空欄にあてはまる語句を後の語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。

日本の①折々の②の美しさを感じ取ってきた筆者は、都会の美術大学を出て③としてのスタートをきった。その後ヨーロッパに留学し、帰国後、④を体験する。④の悲しい思い出はやがて迎えた母の死につながる。こうした人生の旅の中で筆者は自分の⑤観を確立させていった。

【語群】

ア 世界 イ 歴史 ウ 芸術 エ 人間 オ 道徳 カ 戦争 キ 不況
ク 震災 ケ 自然 コ 生活 サ 四季 シ 画家 ス 俳人 セ 小説家

問七 「ひとすじの道」の絵に筆者が込めたものとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア つらく苦しかったこれまでの人生を乗り越えた末に、ようやく穏やかな幸せを手に入れた満足。
イ 自分では動かせない大きな力によって、多くの困難や岐路のある人生を生かされる人間の運命。
ウ これからのように生きていくかという人生の方向性を、自分自身で確かにつかんだという実感。
エ これまでの経験を生かし、今後の人生を、どんな困難にも負けず積極的に歩んでいこうという決意。
オ 人生のさまざまなできごとを経て、これからは自然に任せた生き方をしていこうとする自分の希望。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。主人公北川遠子は小学五年生。同級生の平田愛子とともに小学校の陸上部に所属しており、緒方先生はその陸上部の顧問である。なお、出題に際して本文には省略および表記を一部変えたところがある。

走るのが好きだった。特に、長距離は好きだった。走り始める。苦しくなる。それでも、まだ走り続ける。すると、いつのまにか、周りが変わってくる。

人の声も、姿も、並木も、車も、家も、なにかもが遠ざかり、自分だけが残る。

自分の心臓の音、自分の汗、自分の呼吸。

自分だけしかない場所をひたすら前に走るのだ。いつか、フルマラソンに出てみたかった。

朝、六時に起きて、奈津川の土手を走るのを日課にしていた。練習というより、早朝のびんとはった空気の中を走るのが楽しかった。好きだった。

《中略》

五年の十一月になってすぐ、緒方先生に呼ばれた。

「北川、今度の地区大会のことだがな」

前に立つと、薄青のトレーナーの胸が広い。被さってくるような大きさだ。

1 「おまえ、一〇〇メートルやめて、ハードルに変われ」

「ええ、嫌です」

後ずさろうとする足を止め、ふんばり、先生を見上げた。

「うん」

緒方先生の首が少し揺れる。先生は、遠子から視線を逸らさなかった。

「北川が一生懸命、走り込んだのは、知ってる。けどな、記録がちよっと伸び悩んでるだろ。ここは思いきってハードルに切り替えたほうがいいんだ。いや前から北川をどう使うか悩んでいたんじゃないや。はつきり言って、おまえの一〇〇〇の記録、これ以上あんまり伸びないような気がしてな。北川は、足長いいし、瞬発力がある。ハードル向きやと思う。ちやうどハードルに出場する選手がおらんし、ええチャンスだろ。長距離ばかりじゃのうて、自分の可能性にチャレンジしてみいや。大会まで時間ないしな。競技種目を変えるんなら、今がぎりぎりなんだがな」

薄青のトレーナーが、一歩近づく。

緒方先生の笑顔が近づく。

遠子は、つばを飲み込んだ。

「うち、嫌です」

緒方先生の口元が引き締まる。

「北川、この記録表見てみい。先々月から、全然、記録が伸びてない。むしろ落ちてる。いや、そんな時期もあるんだが、ちょっと不調が長すぎる。このままでは、一番不調なまま記録会と、ぶつかってしまうぞ。それならいっそ、ハードルに変わったほうが、おまえの瞬発力を生かせるぞ。なっ、先生には、わかつとるんだ」

先生には、わかつてる。ほんとうに、わかつている。² 西日を背にうけて、先生は、大きな彫像のように見えた。遠子は、黙って頷いた。

その日から、雨が降らないかぎり、毎日ハードルと向かいあった。

ハードルでは、周りの景色は消えない。自分だけの息や汗を感じることは、できなかった。

「ええな、ハードルをまたぎこすりズムをつかむんじや。それと、高く跳び上がるな。振り上げた足をまっすぐ伸ばして、ぎりぎり上を跳ぶ」

緒方先生の指示を身体で覚えるのに必死だった。

必死になった分、記録は、どんどん上向いていった。

「うん、また、縮まった。調子ええぞ」

ストップウォッチを見せて、緒方先生が笑う。

「なっ、先生の言うたとおりだろ。北川は、ハードルに向いとるんじや」

「はい」

返事してから、遠子も笑おうとした。笑えない。まだ、ハードルが怖かった。

「なんか、ハードルって意地悪みたいに感じる」

練習の後、暗くなった運動場で愛子に言ってみた。

愛子は、声をたてて笑った。

「トコちゃん、おもしろいこと言うな。それって、苦手意識でやつじやろ。いっぱい練習したらだいじょうぶじや。そばで見とったら

フォームなんか、すごいきれいじやで」

「練習か」

「そうそう努力、努力。うちもリレーのアンカーになったし、一〇〇も走るし、がんばるつもり」

遠子は、お正月も練習を休まなかった。

元旦、初詣がすむとすぐ、校庭にやってきた。用具室にカギがかかっていたので、ハードルは出せなかった。走り込みと柔軟体操を一時間ほど、一人でこなしした。

二日目。学校へきてみるとハードルが並んでいた。緒方先生が、やあと手をあげた。そばに愛子もいてVサインを出している。

「いやあ、今朝、ぐうぜん北川のお母さんに会ってな、昼から練習に行く聞いたもんだから。北川がこんなに熱心に練習してるのに顧問のワタクシメがぼけっと正月しとるわけにはいかんじやろ」

「トコちゃん、練習するんだったら、うちも呼んでよね。先生に教えてもらわなかったら、こっちこそぼけっとしてお正月、すごすところだった」

「あほやな、平田は。おれに教えてもらわんでも、北川みたいに自主的に練習しようと思いついたらよかったんだぞ」

「先生、かわいい生徒をつかまえて、あほとはなんですか」

愛子がこぶしを握って、振り上げる。

「わわっ、怖いな。よし、そのまま手を振って、準備体操だ。その後、ランニング。始め」

運動場を駆け足で回りながら、愛子が耳元でささやいた。

「ねえトコちゃん、緒方ってわりにいいところあるよね」

「えっ、いいところって？」

「だって、お正月じやで。こんな時まで練習に付き合ってくれるんじやから、いいところあるが」

あっ、そうかと思った。

休みを返上してまで、付き合ってくれる先生なんて、そういるもんじやない。

3 確かにそうだ。

なのに、少し息苦しかった。

準備体操、ランニング、ハードル練習、ストレッチ。

今日は、緒方先生の言うままに練習をこなしていかなければならない。

真冬にしては、暖かな光の中で、白と黒に色分けされたハードルは妙みょうによそよそしく、気取った大人のように見えた。

三学期に入ってから、遠子の記録は少しずつ縮まっていた。

「ええぞ、北川。もう少しで去年の大会記録に並ぶぞ。大会まで日がないからな、ダッシュ、ダッシュ」

ダッシュ、ダッシュと緒方先生の声が背中を押す。こんなのではないと思う。記録、成績、何分何秒。数字に追いつてられて、苦しくて……。走るのって、こんなのではないと思う。

大会が終われば、すぐにハードルをやめるつもりだった。ハードルをやめて、なんにも縛しばられずに、自分のために走りたい。大会が待ちどおしかった。

ところが、記録会の種目から突然ハードルが除かれてしまった。

「先週、隣町で事故があったやろ。ハードルに足ひっかけて、転んだ中学生が、大けがしたやつ。もし、小学生の大会で、続けて事故があったら困るってことになったらしい。しょうがない、北川は、また一〇〇〇にもどれ。まったく、あれだけ練習したのに、残念やったな」

早口に説明する緒方先生の前で、遠子は4のように立っていた。

しょうがない。残念やった。先生、そんな言葉ですんでしまうんですか。そんなん許されるんですか。

握ったこぶしの内側で汗がにじむ。そのこぶしで殴りつけたかった。先生の心臓のあたりを思いっきり殴ったら、どんな音がするだろう。下唇を強く噛む。口の中に、血の臭いが広がった。

「先生、ずるい」

愛子の声でした。いつのまにか、白いハチマキをしめた愛子が立っていた。

「先生、トコちゃん、あんなに練習しよったのに、かわいそうじゃが」

「そう責めてくれるな。先生じやてつらいんじゃないや。けどな、競技種目を決めるのは、ぼくらじゃないからな、どうにもならんのか。理由が理由だけに、どうしてもハードルをしてくれとは言えんしな。北川、ほんまに悪かったな。おい、平田、そんな怖い顔するなや。まるで節分の鬼みたになっとるぞ」

「もう、失礼な。なあ、トコちゃん」

5 遠子は、相槌を打つことができなかった。

「北川も、そんなにふてくされるな。やれるとこまで一〇〇〇メートルでやってみよう。なっ」

遠子は顔をあげ、瞬まばたきした。

ふてくされてなんかいなかった。そんなんじゃないや。すねてふてくされた後、「しょうがない、残念やった」と諦あきらめてしまえるようなことじゃない。

遠子は、ハードルにちゃんとけりをつけたかった。勝てなくてもよかった。ただ、今までやってきたことをこんな形で無駄にされたくない。

「先生、うち、絶対嫌です」

そう言おうとした。こぶしを強く握り締め、遠子が口を開けるより前に、緒方先生は胸をそらして「ともかく、この話はここまでにしよう」と言った。

「なっ、なにをやったって無駄なことは、ないんだ。今までの練習は、一〇〇〇でも役に立つんだぞ。さっ練習、練習。二人ともそんなぶすつとしたりしたら、嫁に行けなくなるぞ」

先生は遠子の顔を見ない。愛子の背中に手をあてて、軽く前に押し出したただけだった。

「べーだ、先生なんか知らんよ」

愛子が、くくつと笑う。遠子は、こぶしを開いてみた。手のひらに、爪のあとが三つ、細い三日月の形で残っていた。

(あさの あつこ『あかね色の風』より)

問一 本文中の《中略》以降の部分を、できごとに沿って大きく三つの場面に分けると、二つ目と三つ目の場面の始まりはどこか。それぞれの場面の始まりの五字を抜き出して答えなさい。

問二 — 線1 『おまえ、一〇〇メートルやめて、ハードルに変われ』とあるが、次の文はここから読み取ることができる緒方先生の考え方をまとめたものである。本文中の言葉を用いて十字以内で空らんを補い、文を完成させなさい。

陸上競技では何よりも
 には種目を変えることもやむを得ないという考え方。

問三 — 線2 「西日を背にうけて、先生は、大きな彫像のように見えた」という表現から、緒方先生は遠子にとってどのような存在だったとわかるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 遠子のやりたいことを尊重していつも温かく見守ってくれる存在。
 イ 遠子も他の陸上部員たちと同じように大きな信頼をよせている存在。
 ウ 遠子の可能性を全く無視し自分の思った通りに動かそうとする存在。
 エ 遠子がたとえ望んでいないことであつても従わざるを得ない存在。
 オ 遠子の陸上競技の適性を見抜いて誰よりも力になってくれる存在。

問四 — 線3 「確かにそうだ。なのに、少し息苦しかった。」とあるが、この時の遠子の心情を六十字以上八十字以内で説明しなさい。

問五 — 4 にあてはまる最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 影 イ 岩 ウ 壁 エ 波 オ 棒

問六 — 線5 「遠子は、相槌を打つことができなかった」とあるが、この時の遠子の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 先生の指示に従って練習をつむことで三学期になつても順調に記録が縮まつてきており、大会が待ち遠しくなるほどハードルで勝つ自信があつたにもかかわらず、突然中止になつたと知らされてもどうしても納得がいかないでいる。
 イ 好きでもないハードルを必死で練習してきたのに、中止になつたから一〇〇メートルに戻れと急に言われても簡単には受け入れられず緒方先生に怒りを覚えるとともに、これまでの自分の努力に決着がつけられないことに抵抗を感じている。
 ウ 部員にとって重要で真剣な話をしているにも関わらず、先生が軽い言葉ですませようとしたり、いつものように冗談を言つてちやかしたりするのに対して、あきれてものを言う気が失せ、まともに相手をするのがばからしくなっている。
 エ 自分のためではなく、緒方先生や陸上部のためと思ってハードルに打ち込んだのに、中止になつたことをしようがないですまされたあげく、口先だけで先生もつらいなどと言われ、殴りかかりたいほどの怒りが収まらないでいる。
 オ 雨が降らない限りお正月も休まずに毎日頑張つてきたハードルの練習をこんな形で無駄にされたくないのに、子どもにはどうにもできない大人の事情が目の前に立ちばかり、陸上競技に対するやる気がそがれ無力感をいだき始めている。
 問七 遠子にとって長距離走とハードルはそれぞれどのような種目といえるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 長距離走は苦しくても走り続けることによってあるがままの自分を感じることができ種目だが、ハードルはやらなければいけないという義務感にとられ自分らしさが失われてしまう種目。
 イ 長距離走はたとえ苦しくても自分自身の隠された可能性を伸ばす満足感を味わえる種目だが、ハードルはどれだけ記録を伸ばせたとしても本当の自分を決して感じることでできない種目。
 ウ 長距離走は「いつか、フルマラソンに出たい」という自分の大きな夢をかなえるため絶対に諦められない種目だが、ハードルは具体的な目標も見えず熱意をもって練習に打ち込めない種目。
 エ 長距離走は日常生活のわずらわしい友人関係や勉強の苦しさから解放される唯一の種目だが、ハードルは緒方先生が顧問としてどこまでも干渉してくるため自由を味わえない種目。
 オ 長距離走は走るほどに自分だけの世界に没頭していくことのできる孤独な種目だが、ハードルは先生や他の部員たちと互いに励ましあったり競い合ったりして楽しさを共有できる種目。

